

ICT 海外ボランティア会会報

No. 73

2017年6月4日(日)

目次

◆特別寄稿

真藤さんの人となり(4)「意気に感ずる」

当会特別顧問 石井 孝氏

◆特別寄稿

タイ国電気通信に寄与した日本グループ

当会顧問 加藤 隆氏

◆JICAの動き

JICAの民間企業海外展開支援事業(2)

事務局

◆海外グラフィティ

ロンドン漱石記念館

日本ベンダーネット社長 エッセイスト 田上 智氏

◆現地便り

ミクロネシア便り(4)

新東京医科大学ポンペイ校医学部医用工学教室 教授 岡田 一秀氏

◆電友会アクティブシニア支援機構事業への参画(2)

事務局

◆第29回海外情報談話会模様

事務局

◆第30回海外情報談話会開催のご案内

事務局

特別寄稿

真藤さんの人となり(4)「意気に感ずる」

当会特別顧問 石井 孝

前回までの話では、如何にも嫌々ながらのスタートと感じられたのではないかと思う。実際そうであったのである。それが「やる気」になった経緯についてお話したい。



「意気に感じ、息が合えば大抵のことは何とかなる」

大型汎用コンピュータ時代を経験されたエンジニアならお分かりと思うが、ラインプリンタへの出力という作業は結構手間が掛かる。紙がつかえてしまうので、ズッと見張りを立てて置かなければならない。

漸く電子交換機のプログラムのソースコードの打ち出しを終わり、紙の山を見た時は愕然とした。これを解読しなければならないのか。片っ端から隅から隅まで読むとなると、どれ程の時間が掛かるか見当もつかない、それに、そんなことで、皆、興味を持って解読が進むだろうか。

しかし何とかしなければならぬ、皆で議論し、何か良い方法はないか、意見を出し合った。すると、名案が出た。過去数年間に機能追加などで手を入れた箇所を調べてみたらどうか、ひょっとすると箇所に偏りがあるのではないか。

まさにその通りであった。1.必ず手を入れているブロック、2.時々手が入っているブロック、3.全く手が入っていないブロックに三分出来ることが分かった。

それなら、1と2の部分の解読すればよい、これなら何とかかなりそうだとということで解読作業を開始した。それでもたっぷり一年近くの時間を費やしたが、何とか解読を終え、この間に交換プログラム(ソフトウェア)とは何たるかを一応つかむことが出来た。

やってみて分かったことであるが、この1と2の部分はプログラム全体の中の謂わば心臓部とも言えるところであったのである。

真藤語録でいう「**習って覚えて真似して実行する**」の習う段階は、曲りなりにもクリアしたが、覚えるには程遠い、しかし何とか真似して実行したい気持ちに逸った。

当時発足した新電々と電電公社の電話網を接続する為の「ゲートウェイ交換機」が必要となっていた。これは電話網の市外交換機を改造すればよいのでそれ程難しくないであろうと判断し、手を挙げた。一部から危惧というか、揶揄する陰口も耳にした。「あの素人連中に何が出来るか、もし出来たら日比谷の交差点を逆立ちして渡ってみせる」と言ったとか言わなかったとか。「この野郎」と思ったが、成果が出るまでは何と言われても仕方ない。「臥薪嘗胆」とはこういうことか。

作業は殊の外順調に進んでいるように見えた。しかし、かなり進んだレビューの段階で思わぬ手抜かりがある事に気付いた。素人の悲しさである、先に述べた本来2とすべきプログラムブロックを3に残してしまっていたのである。これでは、もう一度初めから見直さなければならない。大変な手戻りである。当然、納期には間に合わない。これが表に出れば、社内からは、「だから言っただろう、彼等のような素人連中に出来る筈がない、直ぐにメーカーに頼んで、納期に間に合わせろ」となるに決まっている。これではサービス超勤など、ものともせず頑張ってきた連中に申し訳が立たないどころか、この一年有余の労苦が水泡に帰してしまう。切羽詰まった心境に追い込まれた。仕方ない、

先ず、思い切って社長に話し相談に乗って貰うしかないかと決断した。思ってみれば公社時代とはまるで逆である、以前は問題は極力トップに知らせず下で処理する、習わしであった。

恐る恐る社長室のドアをノックした。事の次第を説明し、納期遅れになって、社内外に対し大変なご迷惑をお掛けすることになる、と釈明した。すると真藤さんは平然として、顔色一つ変えず「(遅れても)構わない、兎に角、仕上げろ。外野のことは一切心配するな」平気の平左である。安堵というより拍子抜けした。

帰って報告すると、連中は、トップの篤い心意気を感じとり奮い立った。昼夜を分かつたぬ突貫作業で何とか間に合わせてしまった。だから問題は全く表に出ることはなかった。

人間は感情の動物であるから、「意気に感じる」といったようなトリガーが掛かると、会社トップと社員の息さえ合えば不可能は無いつくづく実感した。

修羅場を潜った新組織は、全体がシャンとした、それまでは尻を叩いて回っていたが、独りでドンドン進むようになり、寧ろ此方は後を追う格好になった、内製化は実現出来ると確信した。

実はこの話には続きというか「おち」がある。ずっと後のことになるが、2000年の4月頃だったと思う、真藤さんの業績などを詳しく紹介した「世界制覇」(前間孝則著、講談社)が出版された。これなどを読むと、真藤さんが若い頃からやって来た仕事は我々のそれとは全くスケールが違う。いつも社運が掛かった、伸るか反るかの大事な連続だったのである。それらに比べれば「ゲートウェイ交換機」などは「への河童」である。少々遅れてもNTTの経営に何の影響もない、新電々側にしても電電公社民営化のお蔭で出来たもので、民営化の立役者である真藤さんに文句を言う筈がない。決しておくびにも出さなかったが、あの時、真藤さんは「石井という男も小さい奴」と思ったに違いないと想うと、冷や汗が出る。

少し余談になるが、百田尚樹の出光佐三をモデルとした「海賊とよばれた男」が評判となり映画化もされた。出光佐三の快挙を支えた十万トンタンカーは、出光佐三の心意気に惚れ込んで真藤さんが設計・製造したものである。真藤さんの著書の中で出光佐三を評して、このような件がある、「**自分は自分の道をきちっと行こうとするけれど、そのために相手に損害をかけるとか、自分さえ儲かったらいいということは絶対にやらない。性格的にできない。**」

「海賊とよばれた男」の中で十万トンタンカーは高く評価されているが、真藤さんの名前が一切出て来ないのは淋しい。

何れにせよ、真藤さんの「**エラーを恐れずトライせよ**」の叱咤・激励は、偉い人お決まりの「うたい文句」ではなく、本気・本心・本モノであった。

「エラーを恐れずトライせよ」

誰でも、背任行為をしたとき厳罰を受けるのは当然のことである。それでは何か仕事をして失敗したらどうか。減点主義で臨むか。漫然と仕事をして失敗すれば、怠慢の罪に当たるだろうが、何かに積極的に取り組んでいる時の失敗を、どう考えるかである。

私はいくつもの失敗を重ねてきた。経験のないことをやれば、うまくいかないのは当たり前だ。欠陥がでる。それを改良する。また別の欠陥が出る。トライアル・アンド・エラーの連続である。エラーは出るものなのだ。むしろエラーを恐れてトライしないことが責められねばならない。

ここで注意すべきことはトライした後で、エラーをみつけ出す能力が、その人に備わっているかどうかである。自分を客観視する能力がいる。高く広い判断力を身につけることが大切だ。

タイ国電気通信に寄与した日本グループ

当会顧問 加藤 隆
(元 NTT バンコック海外事務所長)

1. はじめに



他の開発途上国と同様に、かつてタイも電話普及率1%にも満たない時代が長く続いた。それが1950年代から徐々に向上したが、それには日本の献身的な貢献があった。それまではタイの電気通信は欧州を向いていたが、先人の尽力により徐々に日本が主導権を握り、特に首都圏の通信網にはわが国の機器が大幅に導入された。ここではその一端を紹介したい。

今やタイは中進国の仲間入りをし、いわゆる中進国の罫の中で模索している。それから脱却するためにも、またASEAN諸国の中核としての地位を保つためにも、今提唱されている“Industry 4.0”の潮流に乗り、IoT等の技術は国の経済・社会発展の基盤になるとの認識から、政府は“デジタル経済・社会省”を中心として、国を挙げてその振興に取り組んでいる。その基礎を築いたのも日本であると云っても過言ではなからう。

2. 技術協力としての貢献

日本による技術協力の意義と魅力は次の通りである。

[意義]

- ・ 日本政府のODAの理念の実現に寄与
- ・ 途上国の電気通信発展および人材育成並びに日本の海外人材育成に寄与
- ・ 諸外国に対し日本の技術の認識を高め、更に日本企業の知名度向上に寄与
- ・ 日本企業の海外でのプロジェクト発掘・実施の基盤形成

[魅力]

- ・ 主に自主開発による世界に標準化された最新技術による協力
- ・ 多くの技術や保守運用のノウハウを有する熟練し経験豊かな専門家による協力
- ・ 相手側の事情を長期的な観点から勘案し、人材育成をも考慮する協力

以下に主要な事例を紹介する。

(1) モンクット王ラカバン工科大学 (KMITL) の設立並びに多くの専門家派遣
KMITLはわが国ODAの輝かしい成功例のひとつと言えよう。

1959年、駐タイ日本国大使館一等書記官(電電バンコック事務所長兼務)として派遣された牧野康夫氏は日本政府・電電およびタイ国政府・TOT(タイ電話公社)間の幾多の調整を経てノンタブリ訓練センター(後、KMITL)設立に尽力し、日-タイ技術協力の基礎を作った。今や広大なキャンパスに校舎がところ狭しと建設され、学部13、研究センター2、学生数1万6千名を擁するタイ国有数の大学に成長している。

日本からの長期専門家は67名である(NTT、東海大学、NHK、MPT、JICA、KDD)。

(2) タイ電気通信協会(TCT: Telecommunications Association of Thailand)設立および運営支援

1990年、日本の電気通信協会のアドバイスと支援によりに設立され、以来、両協会間の覚書に基づき、毎年 Joint Seminar が開催されている。その内容は、①日本における電気通信・情報通信の技術動向の共有（講演者は NTT 等）、②タイにおける電気通信・情報通信に関する現状・将来計画および政策（講演者は大臣、政府機関、運営体等）である。タイの電気通信・情報通信の向上および両国間の交流に寄与し、すでに27回実施され年々充実している。

（3）アジア大洋州電気通信共同体（APT: Asia Pacific Telecommunity）の運営支援

1979年に設立され本部はバンコックにある。現在、構成メンバーは会員38カ国および準会員4カ国の政府である。賛助会員として各国主要運営体および製造会社等がある。活動は域内開発途上国の電気通信サービスやインフラ整備の支援を通して域内の発展に寄与することであり、そのため日本政府（総務省）は出資、セミナー開催、人材派遣等を行う等運営に大きく寄与している。

（4）技術専門家・青年海外協力隊等の派遣（電電・NTT 関連）

タイ政府の要請に基づき、電電（NTT）から JICA・ITU 等長期専門家（KMITL, TOT, APT 等）65名、青年海外協力隊5名、シニア海外ボランティア2名が派遣された。

（5）タイからの叙勲・感謝状等の授与（電電・NTT 関係者、敬称略）

KMITL 名誉博士号授与：米沢 滋（元電電総裁）、牧野康夫（元バンコック事務所長）

白象勲章授与：秋草篤二（元 NTT 社長）、山口開生（元 NTT 社長）

国王から感謝状等授与：田代穰次（元 NTT 国際局長）、池沢英夫（元 NTT 施設局次長）

3. 電気通信網拡充に寄与

（1）終戦直後の日本の電話事情と技術開発・実用化

電話設備は他のインフラと同様にとことん壊滅し、1945年には日本国中で54万回線しかなく、普及率はわずか0.5%であった。一方、産業と経済の回復スピードは速く、電話の需要が急増し、1971年には積滞数は290万件に及んだ。また、市外通話はオペレータ経由で、接続までに多くの時間を要した。

それに対応すべく、電電公社は「申し込んだら直ぐつく電話」、「全国どこへでもダイヤルでつながる電話」の二大目標を掲げ、これら目標の達成のため、電話網を構成する機器やケーブルの研究実用化、保守運用体制の強化等に官民が一体となって取り組んだ。

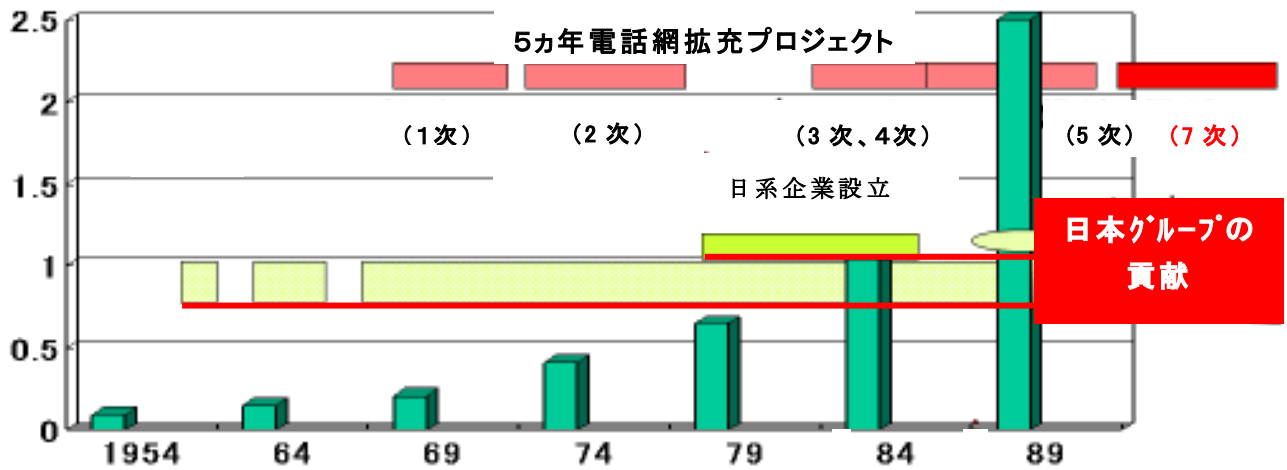
機器やケーブルの研究実用化については、電電の研究所・技術局が中心となり、各メーカーとの共同研究を含め、世界の動向を勘案しつつ精力的に進められた。その主眼点は、機器・ケーブルの低コスト化、コンパクト化、高耐久性化及び高信頼性化であり、更に保守運用の容易性、大量生産性の向上であった。

それらは1950年から1980年にかけて実施されたが、対象は市内・市外クロスバ交換機、マイクロ無線伝送、PCM伝送、光ファイバーケーブルや同軸・PEFケーブルなど多方面に及んだ。

（2）タイ国電話網拡充と日本企業の貢献

タイにおける固定電話の慢性的で大幅な積滞解消の兆しは、日本に遅れること凡そ20年、主に日本グループの尽力でなされた。その場合、日本で NTT が中心となって研究・実用化された前述の機器およびノウハウが大幅にタイに導入され、それがタイの電話網拡充に大きく寄与した。

タイの電話普及率（%）、5カ年プロジェクトおよび日本企業の貢献を次図に示す。



1956年：タイ文字電信印刷機器輸出（新興電気）

Swang氏（PTD）が開発に尽力、長期間、標準機として使用

[日本企業は1950年代よりタイ側に接触開始（主にNTCがTOTに対し）]

1964年：Bangkok Transit Cable Network Project 受注（NTCがTOTより）

タイの局外プロジェクトとして日本グループ最初の受注、全長60km

ケーブル：藤倉、工事：日通建、支援：電電、その結果、日本の知名度向上

1965年：Bangkok Local Cable Network Project 受注（NTCがTOTより）

タンキーベース、200km、10億円

ケーブル：藤倉、工事：日通建、交換機（C1）：沖、三井物産

1969年：第1次5カ年電話網拡充プロジェクト受注

バンコック市内網、電話15万回線分、最初の大規模国際入札

交換機（7.5万回線）：NEC、ケーブル：藤倉、工事：日通建

[この間に、タイ現地に日系ケーブル製造会社3社（古河・日立電線・住友）、工事会社4社（日通建・協和・古河・住友）設立]

～1992年：第2次、第3次、第4次、第5次5カ年電話網拡充プロジェクト受注

(3) 1993年：第7次5カ年電話網拡充プロジェクト受注（日本グループ大活躍）

タイ国国家経済社会開発計画の一翼を担い、電話普及率10%を目標とした。

バンコック首都圏 200万回線＋60万回線（追加）

地方（首都圏以外） 100万回線＋50万回線（追加）

[実施体制]



主要工程として、交換装置はデジタル交換機、基幹回線および加入者回線の縁石まで光ケーブル伝送である。受注会社数の3/4を日本勢が占め日本主導で実施された。

局内系では、交換装置はNEC、有線伝送装置は富士通が健闘した。局外系では、光ケーブル供給には現地に工場を設置した会社のほか藤倉が活躍した。局外系工事では、現地法人を設置した会社が受注した。交通渋滞の厳しいなか順調に推移し、追加工程も含め工期内で終了した。

この間、日本企業の現地スタッフ、また日本企業の現地関連会社として工事に従事したタイ側は、これを **on the job training** の場として活用する等により大きく成長し、その後、タイ独自で工事が出来るようになった。

このプロジェクトの基本計画のベースは、ODAとしてNTTが実施した(1988-1992)。また、NTTは熾烈な入札競争の末にTT&Tの経営権獲得に成功し、投資のほか約50名の社員を派遣し、各種マニュアル作成や人材育成に寄与した。(了)

JICAの動き

JICAの民間企業海外展開支援事業(2)

事務局

JICA事業については、円借款、無償資金協力、技術協力、シニア海外ボランティア(当会報第71号掲載)、青年海外協力隊などを思い浮かべる方が多いと思いますが、以下のような民間企業への海外展開支援事業についても注力しています。

- ・ 中小企業海外展開支援事業(基礎調査、案件化調査、普及・実証事業)
- ・ 途上国の課題解決型ビジネス(SDGsビジネス)調査
- ・ 民間技術普及促進事業(当会報第72号掲載)
- ・ 協力準備調査(PPPインフラ事業)
- ・ 民間連携ボランティア
- ・ 国際協力キャリア総合情報サイト(PARTNER)
- ・ 日本センター
- ・ アフリカの若者のための産業人材育成イニシアティブ(ABEイニシアティブ)、等

今回は、中小企業海外展開支援事業についてご紹介いたします。本事業は、例年2回公示があり、今回は秋頃と想定されますので、皆様の関係する中小企業等においても、本事業への応募可能性についてご検討いただければ幸いです。

中小企業海外展開支援事業の概要

2012年3月、日本政府による「中小企業海外展開支援大綱」の改訂により、オールジャパンでの中小企業の海外展開支援体制にJICAもメンバーとして加わることとなりました。本改訂を受け、JICA全体での取り組みを強化するため、政府開発援助中小企業等海外展開支援事業本部を設置し、政府開発援助（ODA）による中小企業海外展開支援を2012年度より開始しました。

日本の中小企業が有する優れた技術・製品を途上国の開発に活用し、開発課題の解決に貢献することを目的としています。また、全国の中小企業の海外展開を支援することで、日本経済の活性化、地域活性化に貢献することも期待されます。なお、本取組は日本政府の日本再興戦略の重要施策としても位置づけられています。

中小企業海外展開支援事業には、基礎調査、案件化調査、普及・実証事業があります。

https://www.jica.go.jp/sme_support/index.html

1. 基礎調査

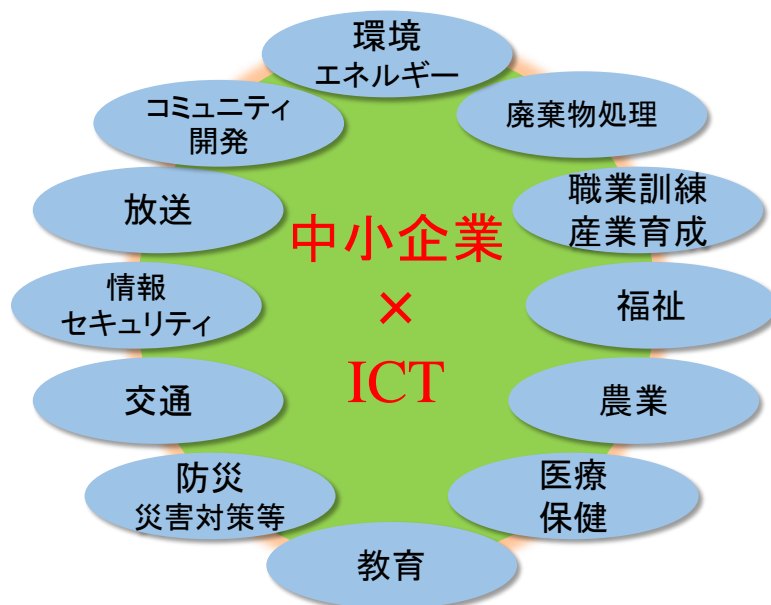
- ①概要：中小企業等からの提案に基づき、開発途上国の課題解決に貢献する中小企業等の海外事業に必要な基礎情報収集・事業計画策定のための調査
- ②上限金額(税込)：**850万円**
- ③協力期間：数か月～1年程度
- ④JICA負担経費：人件費(外部人材活用費のみ)、旅費、現地活動費、管理費
- ⑤契約方式：採択企業への業務委託(補助金事業ではない)
- ⑥採択予定件数：本年度26件程度

2. 案件化調査

- ①概要：中小企業等からの提案に基づき、製品・技術等を途上国の開発へ活用する可能性を検討するための調査
- ②上限金額(税込)：**3,000万円**(機材輸送が必要な場合、5,000万円)
- ③協力期間：数か月～1年程度
- ④JICA負担経費：人件費(外部人材活用費のみ)、旅費、現地活動費、本邦受入活動費、管理費
- ⑤契約方式：採択企業への業務委託(補助金事業ではない)
- ⑥採択予定件数：本年度70件程度

3. 普及・実証事業

- ①概要：中小企業等からの提案に基づき、製品・技術等に関する途上国の開発への現地適合性を高めるための実証活動を通じ、その普及方法を検討する事業
- ②上限金額(税込)：**1億円**(一定条件下で1.5億円)
- ③協力期間：1年～3年程度
- ④JICA負担経費：人件費(外部人材活用費のみ)、旅費、機材製造・購入・輸送費、現地活動費、本邦受入活動費、管理費
- ⑤契約方式：採択企業への業務委託(補助金事業ではない)
- ⑥採択予定件数：本年度29件程度



4. 採択事例(ICT 関連を中心に抜粋)

年度	国名	案件名	提案者
基礎調査			
2015	ミャンマー	IT 人材育成の可能性の基礎調査	オー・エイ・エス、 インフォテック・サー ープ、ポータス
案件化調査			
2012	ベトナム	ICT を駆使した遠隔診断・遠隔研修医療連携事業調査	ViewSend ICT・シス テム科学コンサルタ ンツ共同企業体
2012	フィリピン	農産物流通 IT 導入案件化調査	イーサポートリンク
2013	ベトナム	医療の質を高める地域医療情報ネットワークシステ ム案件化調査	テクノプロジェクト・富士通総研共同 企業体
2013	バングラデ シュ	太陽光発電および無線通信を活用した河川監視カメ ラシステムによる水防災対策事業に係る案件化調査	イートラスト・アラ イアンス・フォーラ ム財団共同企業体
2013	インドネシ ア	緊急告知ラジオによる災害情報提供を活用した地域 住民災害対応能力強化案件化調査	ワキヤ技研・オリエ ンタルコンサルタン ツ共同企業体
2013	インドネシ ア	多目的ダム管理や気候変動対策のデータ収集効率化 に向けたリアルタイム監視システム(Sesame システ ム)案件化調査	みどり工学研究所・ かいはつマネジメン トコンサルティング 共同企業体
2014	バングラデ シュ	脆弱な通信環境に対応できる e ラーニングシステムを 使った情報処理技術者試験(ITEE)対策講座の案件化 調査	教育情報サービス
2014	南アフリカ 共和国	妊産婦ケアにおける遠隔医療システム導入案件化調 査	ミトラ
2014	インド	携帯電話基地局情報を利用した貨物トラッキングシ ステムの案件化調査	ジェネシス

2015	ルワンダ	初等算数教育への ICT 活用による教育の質向上を目的とした案件化調査	さくら社
2015	キルギス	政府機関職員の能力向上のための学習管理システム(LMS)の導入にかかる案件化調査	デジタル・ナレッジ
2015	タイ	福祉・保健医療向上に向けた ICT 技術を活用した「みまもりシステム」にかかる案件化調査	エイビス
2015	インドネシア	センサーネットワークを活用した即時地震警報による地域防災案件化調査	チャレンジ
2016	ケニア	教育の質向上の為に e ラーニングシステム導入に係る案件化調査	教育情報サービス
2016	ミャンマー	遠隔医療システム XMIX を活用した妊産婦検診の改善に向けた案件化調査	TRIART
2016	エクアドル	視聴覚障害者の放送アクセスを保障するアイドラゴンを活用した災害復興に関する案件化調査	アステム
普及・実証事業			
2012	ベトナム	ICT を駆使した医療連携技術協力型普及・実証事業	ViewSend ICT
2012	フィリピン	農産物流通 IT 導入普及・実証事業	イーサポートリンク
2013	インド	グジャラート州主要都市 ITS 事業普及・実証事業	ゼロ・サム
2013	ベトナム	医療の質を高める地域医療情報ネットワークシステムの普及・実証事業	テクノプロジェクト
2014	インドネシア	産学連携による e ラーニングを活用した子供たちの数学の学力達成度強化のための普及・実証事業	すららネット
2014	ラオス	ビエンチャン市都市交通改善のための位置情報・交通観測システム普及・実証事業	社会システム総合研究所
2014	タイ	設計エンジニア育成 e ラーニングシステムを中心とした産学連携教育プログラムの普及・実証事業	シーイー・フォックス
2014	フィリピン	地域防災能力向上のための統合型地理情報システムの普及・実証事業	インフォマティクス
2014	インドネシア	多目的ダム管理や気候変動対策のデータ収集効率化に向けたリアルタイム監視システム(Sesame システム)普及・実証事業	みどり工学研究所
2015	バングラデシュ	脆弱な通信環境に対応できる e ラーニングシステムを使った情報処理技術者試験(ITEE)対策講座の普及・実証事業	教育情報サービス
2016	ベトナム	障がい者のエンパワメント向上を目的とする ICT 教育センターの普及・実証事業	日本テレソフト
2016	スリランカ	地すべり遠隔監視システム普及・実証事業	オサシ・テクノス
2016	スリランカ	地上デジタルテレビ放送日本方式向け受信機の普及・実証事業	トスレック

ロンドン漱石記念館

日本ベンダーネット社長 エッセイスト 田上 智氏



1984年に設立された「ロンドン漱石記念館」は残念ながら2016年9月末をもって閉館となった。5回下宿を変わった漱石だが、最後の下宿ザ・チェイスの向かい側に設立された記念館を、かつて訪れたことがある。創設者は、「こちらロンドン漱石記念館」の著者でもある恒松郁生さんである。

仕事柄、松山にはしばしば訪れるが、ここには、ご存知「坊ちゃん」の舞台となり、漱石の赴任先である旧制松山中学の跡地がある。この地には、なんと、NTT西日本事業本部と愛媛支店のビルがある。ところが、それ以外で漱石にちなんだものは、ほとんどなきに等しい。

あえて言えば、下宿としていた「愚蛇仏庵」くらいか。たとえば、“松山・漱石記念館”なる物はどこを探しても無いのだ。

漱石は1893年（明治26年）東京帝国大学を卒業後、高等師範学校の英語教師となるが、2年後、旧制松山中学（現・松山東高校）に赴任する。わずか1年で熊本の第5高等学校に転任、そして、1900年（明治33年）から2年間文部省からイギリス留学を命ぜられる。これが、ゆくゆくは、ロンドン漱石記念館につながっていくわけであるが、話を松山に再び戻そう。

松山は、なんといっても漱石より俳句の「正岡子規」なのである。司馬遼太郎の「坂の上の雲」で一躍世に知られたのが、正岡子規、帝国陸海軍の基礎を築いた、秋山好古、正之兄弟であり、今はそれに因んだ「坂の上の雲ミュージアム」なるものもある。松山は「俳句王国」であり、NHKで同名の番組も流されている。松山には当然のごとく「松山市立子規記念館」もしっかりと存在する。

かくして、ロンドンという異国の地で「漱石記念館」があったのは、不思議ともいうべきだった。ロンドンの漱石は神経衰弱に悩まされ続け、大学の講義は受けずに、シェイクスピアの研究者を家庭教師として雇ったり、滞在中、800冊以上の本を買いこんで読んでいた。

ロンドン見物としては、倫敦塔を一度だけ訪れ、その名も「倫敦塔」という小品をものにしているが、文中、倫敦塔を見事に数行で表現している「倫敦塔の歴史は英国の歴史を煎じ詰めたものである。・・・すべてを葬る時の流れが逆しまに帰って古代の一片が現代に漂い来れりとも見るべきは倫敦塔である。人の血、人の肉、人の罪が結晶して、馬、車、汽車の中に取り残されたるは倫敦塔である。」古代とは言わないまでも、実際訪れてみると、中世にタイムスリップした感があるのは事実だ。

もう一つの作品は「虞美人草」である。留学時、漱石は、1900年に開催されたパリ万国博を訪れたが、その後、1907年（明治40年）に開催された東京勸業博覧会を舞台とした「虞美人草」を著している。パリ万博を訪れた時の衝撃が作品のきっかけとなったと言われている。

松山という地方都市での大都会東京との違和感、当時世界の中心ともいうべきロンドンとアジアの新興国日本との違いなど、細い神経ながら、案外ちゃっかり作品に残しているのが夏目漱石なのだ。（了）

（追伸）

本日（5月9日）の日経新聞にびっくりするニュースが載っていた。「ロンドン漱石記

念館」が来夏に再オープンするという。研究者やファンからの要望で、館長の恒松郁夫さんが、ロンドン南部の恒松さんの自宅に展示スペースを設け、再開することとなった。

現地便り

ミクロネシア便り(4)

新東京医科大学ポンペイ校医学部医用工学教室 教授
御殿場基礎科学研究会 オセアニア支部長
太平洋地域医学会 会長
岡田 一秀 Ph.D

ICTの皆さま、お元気でしょうか？

日本から、南東側に3000kmほど離れたミクロネシア連邦におります岡田です。

5月に入り、ミクロネシア連邦は朝方涼しく湿度が抜けている日もあるのですが、日中は毎日だいぶ暑くなりました。赤・ピンク・黄のハイビスカスの花が美しく咲いていますが、余りに当り前すぎて、女性が髪飾りにする以外は見向きもしません。



また、こちらはトカゲやヤモリが多いですが、身の防御のために、再生可能な足や尾を自切したり、そうかと思えば、自室で60°の傾斜があるファンの箱の上に止まったかと思うと、そこが外敵もおらずパラダイスと見たのか、そのまま動かず天寿を全うしてしまう、爬虫類の不思議にも出くわします。

12～2月は最高気温で25℃、また最低気温で20℃であったが、最近では暑くなったためにコート姿の人や地元の厚手のポンペイスカートなどの着用者は消えました。日本人の平均汗腺数が230万個に対し、北極圏に住む人は180万個、ここミクロネシア連邦含め熱帯に住む人は280万個もあるので、個々人の放熱性はよく、予想以上に寒く感じるようです。

医師(8割)や看護師(2割)を目指す学生のために、自分自身は金曜日集中的に7時間、医用工学を教え、また郡部の高校併設の社会人大学である別校には、月曜日3時間ほど工業数学と物理学を教えに行っています。

こちらの国の人たちは独立してまだ30年くらいしか経っていないせいか、休日がつながり直前ないし職場に来てから思い出すことが多く、殆どの人は1週間前には認識していない。前週、「See you next week!」と言う多くの教員の言葉を信じて1時間海越え山越え自車で別校に行ったら学生含め誰もいなかったこともありました。5月10日(水)も憲法記念日でありながら、私ほか秘書や多くの教職・学生が出て来てしまっていました。

各教職から供出された大学博物館用ポスター資料を制癌・糖尿病の本質・医療統計学等の分野に関してデモ試料/機械付きで、自分の場合、4編(各6ページをA3に拡大して貼り付ける)ほど出来上がりました。

http://www.geocities.jp/hrasdhserdh/Theme_1_Body_Temp.docx

http://www.geocities.jp/hrasdhserdh/Theme_2_PEM_for_Breast_Cancer.docx

http://www.geocities.jp/hrasdhserdh/Theme_3_Diabetes.docx

http://www.geocities.jp/hrasdhserdh/Theme_4_Correlation_Analysis.docx

また、我々のやっております、太平洋地域（20カ国＋10郡／州）包括の医学会の直近の学会誌も出し、さらに今月末に向け自らも紙面を埋めつつ次号の論文投稿を募集している処です。

http://www.geocities.jp/rainbow_8092/PALM_s_Outline.pptx

http://www.geocities.jp/hrasdhserdh/Pub_No6_Mar2017_PALMS.pdf

太平洋全体の医療を見ざるを得ない立場の人間としては、主人公であるローカルの人達にもっとも投稿してもらいたく、実際、構成としてはそうなっているのですが、大陸側の医療も歴史が長いだけに何処に対しても関心と敬意を持っています。ミクロネシア連邦のポンペイ州では、大陸と言う意味では豪州・中国・米国と3つ大使館があり、中国との学生交換や医学のエンハンスメントのコラボを先日、大使と4名の書記官の方が来られ、中国と確認したばかりです。また、研修医派遣と言う意味では、従来のフィリピンに加えジャマイカも加わり、また日本の大学・病院等の組織とも追加の共同研究や学生交換等を模索中です。自分の研究の半分ほどは学生への授業に内容や結果のフィードバックをかけるのですが、今月中旬～下旬の火～木曜（つまり授業のない日）には新たなアイデア出しや実験に費やしたいと思っています。

日本からも健康・医療に関わる技術テーマ、あまり知られていないロジカルな健康法等の論文は歓迎です。実験してデータを集め、方法論・結果と考察を特許やペーパーにしたための若い頃を思い出して書けば、私も含め若返ります。よろしくお願いします。

がん患者数推移（日本）					
	2014年実数(人)	2015年実数(人)	(前年比伸び率(%)	2016年実数(人)	(前年比伸び率(%)
胃	130,700	133,000	1.8	133,900	0.7
肺	129,500	133,500	3.1	133,800	0.2
前立腺	75,400	98,400	30.5	92,600	-5.9
乳房	86,700	89,400	3.1	90,000	0.7
大腸	128,500	135,800	5.7	147,200	8.4
肝臓	46,300	47,300	2.2	45,100	-4.7
食道	23,200	23,900	3.0	22,800	-4.6
膵臓	37,700	38,700	2.7	40,000	3.4
膀胱	21,300	21,300	0.0	21,900	2.8
腎・尿路	24,700	28,700	16.2	29,400	2.4
悪性リンパ腫	27,900	29,700	6.5	31,200	5.1
胆嚢・胆管	26,400	26,700	1.1	26,500	-0.7
口腔・咽頭	19,500	19,500	0.0	21,700	11.3
皮膚	20,300	24,400	20.2	26,000	6.6
白血病	13,100	13,800	5.3	14,200	2.9
甲状腺	16,000	17,900	11.9	18,100	1.1
咽頭	5,100	4,700	-7.8	5,000	6.4
多発性骨髄腫	7,700	8,600	11.7	8,700	1.2
脳・中枢神経系	5,700	5,100	-10.5	5,000	-2.0
全がん	882,200	982,100	11.3	1,010,200	2.9

また、日本の医療統計が入って来ますが、最近増えている病があります。私の周囲でも乳がん・心筋梗塞になったり、ラクーナ梗塞（比較的細い血管が詰まる原発得性の脳梗塞の一部です。血栓が小さいのが1～2なら日常生活の何の差し障りもないのですが、それが増えて来ると記憶の維持等の問題発生）になったり。また、予防・治療や早期発見等はこちらからも追って提起して行きますが、皆さま、健康には十分ご注意ください。

就業促進の動き

電友会アクティブシニア支援機構事業への参画(2)

事務局

電友会が本年3月設立した特定非営利法人アクティブシニア支援機構(ASO)の「就労支援団体育成モデル」事業がいよいよ活動開始しています。 <http://asono.jp>

ICT海外ボランティア会(ICTOV)は、下記のとおり本事業に積極的に参画いたします。

- ① ASOの動向等に合わせ、ICTOV会報等により各種業務の就労希望者を広く募集いたしますので、奮ってご応募ください(詳細は別途ご案内)。
- ② 緊急応募等で時間的な余裕がない場合、個別メールを配信する予定です。このような個別メール配信を希望される方は、下記連絡先にご氏名及び就労促進個別メール配信希望の旨をご連絡ください。

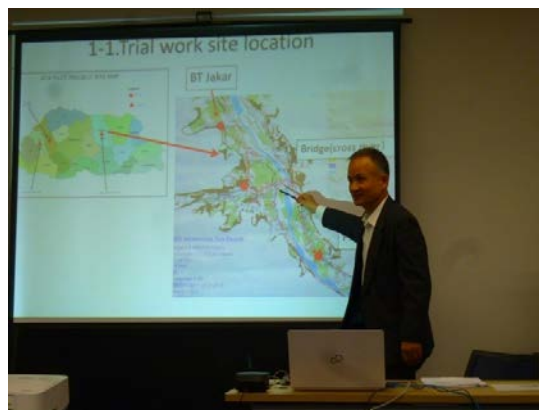
<連絡先> 事務局 info.ictov@network.email.ne.jp

談話会の話、あれこれ

第29回海外情報談話会模様

事務局

第29回海外情報談話会が2017年5月24日(水)15時～17時、(一財)海外通信・放送コンサルティング協力(JTEC)及びWeb会議において開催された。講師は山口順也様(本年2月まで駐ブータンJICA専門家、元NTT東日本国際室)、演題は「ブータンの一般事情とICT化動向」であり、参加者は26名(Web参加4名含む)であった。



ブータンにおけるJICA技術協力プロジェクト、ICT動向、一般事情について幅広く話された。数回にわたり計10年近くブータン駐在勤務されたことから、現地のブータンテレコム(BT)社員等との粘り強い協力・ご指導と多大なご苦勞が滲み出るものであった。

写真をふんだんに活用されたので、非常にわかりやすく身近に感じることができた。以下にいくつかの話題を列挙する。

- ・ JICA 技術協力プロジェクト(2014 年 4 月～2017 年 3 月)の目標は、「BT 技術者の光ファイバーNW の設計施工・保守運用に関する能力の向上」であり、①技術マニュアルが整備、②光ファイバー加入者網の O&M 体制が確立、③トライアル工事の技術指導による 2 都市における光ファイバー加入者網の構築、について所期の成果を得た。
- ・ 他国の技術協力プロジェクトに比べて、工程管理、安全管理などについては日本人専門家が得意な技術移転と思う。また、日常的なカイゼン活動に積極的に取り組んだ。
- ・ 光ケーブル工事について地元テレビ局、新聞社による報道があった際、工事中にも関わらず、通話品質向上を期待した顧客からすぐに電話開通申込が舞い込むこともあった。
- ・ BT は 2014 年度売上高約 43 億円であり、固定電話 23 千加入、携帯電話 486 千加入、インターネット 27.6 千加入である。3G/4G 携帯電話は 2013 年、携帯電話による送金・支払は 2014 年、データセンタ及びクラウドサービスは 2016 年に開始されている。社員数は約 650 名である。



- ・ ブータンは人口約 75 万人、北部は標高 3,000 メートル以上のツンドラ気候、中部は 1,200～3,000 メートルのモンスーン気候、南部は 1,200 メートル未満の亜熱帯性気候である。南北に山脈があり、東西移動する場合は何回も山越えが必要である。しかし、山は神聖と考えており、トンネルはない。山岳道路はガードレールがない所が多く、谷底に落ちる交通事故が時々発生する。同乗予定であった BT 車両が落下し、全員死亡したことがあった。冬場は凍結のため通行止めとなる。
- ・ ブータンと言えば、GNH (Gross National Happiness)を思い浮かべる人が多いと思う。GNH は健康、文化、コミュニティ、自分の時間の使い方など、9 分野 33 指標で数値化されている。例えば、心理的な幸せ(生活の満足度、様々な出来事に対してポジティブかネガティブか)、24 時間の使い方(1 日 1,440 分をどう使っているか。仕事・睡眠・社会との交流等のバランス)、コミュニティの活力(災害などの危機や不幸事、高齢化に伴う問題が起きた時に頼りになる人が何人いるか)などである。政府の聞き取り調査では、90% 以上の国民が幸せと回答しているが、国連の国民幸せ度 2016 年調査では世界第 97 位であった。
- ・ ブータンには光と影がある。光の部分としては、豊かな人間性(思いやり、穏やかな性格、忍耐強い)、ブータン人の高いポテンシャル(高い識字率、英語力、バランスのとれた外交調整)、自然環境の保全(伐採の規制、植林の推進等)、多数の水力発電プロジェクトを推進中(インドへの売電収入→国民所得の向上)、海外へ人材派遣(中近東へホテル・観光会社の従業員、本年 4 月から日本へ外国人介護実習生)などである。一方、影の部分としては、窃盗、ドラッグ、物乞い、自殺、鬱、農村部での人手不足・高齢化、都市部への若者移住(しかし、就職難→失業増加)などが起きている。バランスが狂ってきている感じである。

- ・インドとの貿易が最大である。以前は、インドとの国境は自由に行き来できたが、最近は国境フェンスが設置されている。また、中国との国境は 2006 年にブータン側の国土が縮小する形で変更された。
- ・都市化が急速に進み、伝統的な木造建築物がコンクリート建築物に変わっている。高級ホテルも多数開業した。
- ・民族衣装（ゴ・キラ）は政府機関への入出や公式行事のみ着用し、普段はユニクロなどのカジュアルな洋服が大半になった。
- ・松茸が安く、1 キロ 1,000～2,000 円くらいである。唐辛子は大量に生産・消費される。気圧が低いので袋入り食品がパンパンに膨れる。
- ・アーチェリーが盛んであり、いつかオリンピックでメダルを取れるかもしれない。夜間照明付きのサッカー場もあり、FIFA アジア大会が行われた。
- ・ブータンの良さがまだ残っているので、早めのブータン旅行をお勧めする。往復航空賃を含めて 1 週間 30～40 万円程度で楽しめる。

質疑応答では、近代化・交通渋滞、インドへの売電、ホワイトカラーを好むこと(ブルーカラーはインド人、バングラ人)、インド・中国とうまく付き合うこと、日本との長い友好の歴史と強い信頼などについて、活発な意見交換があった。

今回、Web 会議システムによる遠隔参加は 2 回目となり、札幌市、四日市市、金沢市、奈良市からの参加があった。開始直後は少しモタついたが、パワーポイント資料の共有閲覧も問題なく進めることができた。地方創生の一步と言うほどではないが、全国あるいは世界との相互交流・ビジネス展開の一助になればと思う。

お知らせ

第 30 回海外情報談話会開催のご案内

事務局

第 30 回海外情報談話会を下記のとおり開催いたしますので、奮ってご参加ください。

1. 日時 2017 年 6 月 30 日(金)15 時～17 時
2. 場所 (一財)海外通信・放送コンサルティング協力(JTEC)及び Web 会議(注)
東京都品川区西五反田 8-1-14 最勝(さいしょう)ビル 7 階
<http://www.jtec.or.jp/about/access.html>
3. 講師 NTT 関係技術士の会 飯田敏幸代表幹事、本間勝幹事、倉島渡幹事
4. 演題 「NTT 関係技術士の会とその海外活動」
5. 定員 35 名(先着順。どなたでも参加可能です)
6. 参加費 無料
7. 申込方法 参加ご希望の方は、下記連絡先にご氏名をご連絡ください。
<連絡先> 事務局 info.ictov@network.email.ne.jp

☆技術士の方々との連携により、新たな視点とビジネス機会を掴みたい。乞うご期待!

<次回予告> 第 31 回海外情報談話会は 7 月 20 日(木)又は 21 日(金)15 時～17 時に開催予定(別途、正式にご案内いたします)。

(注) Web 会議へのご参加は東京首都圏以外からのご参加に限定いたします。ご氏名のほかメールアドレス及び参加時の県名(海外は国名)をご連絡ください。Web 会議への参加方法は次のとおりです。

①次のサイトで初回のみ、Zoom Client for Meetings(サイトの一番上にあるもの)をダウンロードし、インストールする(無料)。Zoom はクラウドベースの Web 会議システムであり、パソコン、スマホ、タブレットのいずれでも可能です。

<https://zoom.us/download>

②Web 会議の案内が開始 5 分前までにメールで届くので、メールで指定された会議室に入室する。

会報お読みの方々へのお願い

当会の拡充とともに、会報の充実も図ろうといたしております。

このため、会報をお読みになった皆様のご感想、ご意見、ご要望は、会報作成のみならず当会運営にあたって大きな方向付けに役立ちます。どうぞご遠慮なくお送りくださいますようお願い申し上げます。

<送付先> 事務局 info.ictov@network.email.ne.jp 又は

会報担当 村上勝臣 katsumi.murakami@jcom.home.ne.jp

編集後記(編集長から一言)

会報第 73 号を発行しました。皆様、ご寄稿などのご協力をありがとうございました。

20 年ほど前から趣味で、NHK FM の日曜昼 12 : 15 「日曜談話室」というトーク番組を聞き続けています。先日の話題は、「漱石を語ろう」でした。今年は漱石誕生 150 年、この好機会に田上さんから「ロンドン漱石記念館」を寄稿して頂きました。

海外情報談話会は今回も曲りなりにも地方参加者と Web 会議で結び、多元中継を実施しました。今後、どんどん広がることを期待しています。

発行： ICT 海外ボランティア会(ICTOV)

会報担当： 村上 勝臣(編集長兼広報部長)、山川 博久(事務局長)

ホームページ担当： 山崎 義行(報道部長)、安達 信男(幹事)